

令和 2 年 5 月 27 日現在

機関番号：13102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13518

研究課題名(和文)多読による速読力と語彙サイズへの影響調査と指導指針の提言

研究課題名(英文) Research on the effects of extensive reading on the reading fluency and the vocabulary size development and suggestions on the detailed instruction guidelines

研究代表者

藤井 数馬 (Fujii, Kazuma)

長岡技術科学大学・工学研究科・准教授

研究者番号：50413779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で得られた主な結果は、高専2年生を対象に半期で5万語程度の多読を行うことで、意味理解を伴う英文読解速度は有意に上昇する、習熟度が高い学習者は早い段階(5万語よりも少ない語数)で読解速度が上昇する、高専3年生を対象に年間で5万語程度の授業内多読を行うことで、語彙サイズは広がるものの効果は限定的である、語彙サイズを大きく広げた学習者は読解時に未知語に対して強い注意を向けていた傾向がある、ということである。以上の結果から、多読を通して高専生の英文読解速度を高めるためには半期で5万語以上読ませること、語彙サイズを高めるためには明示的な指導も組み込む必要があることを指導指針として提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多読は英語運用能力向上に効果的だと指摘されているが、「どのような学習者に対して、どの程度、どのような英語を、どのように読めば何に効果的なのか」という点は学術的に十分に探究されていない。そこで本研究では、A1～A2レベルの学習者に対して、半期で約5万語、年間で約5万語のやさしい英語を読ませる指導を行うことで、英文読解速度と語彙サイズに対してどのような影響を与えるのかに関して調査を進めた。本研究結果により示唆された、英文読解速度向上のために半期で5万語以上読ませる、語彙サイズ向上のために明示的指導も組み合わせるといった指導指針は、市民にもセミナーや講座を通して還元、共有できる成果である。

研究成果の概要(英文)：The main results obtained in this research are：(1) Experiencing extensive reading (ER) and reading approximately 50,000 words in 15 weeks significantly increased the reading fluency of the second-year students at a technical college; (2) Learners at A2 level on the CEFR improved their reading speed at an earlier stage (less than 50,000 words of reading) than those at A1 level; (3) Reading approximately 50,000 words in 30 weeks incrementally increased the vocabulary size of the third-year students at a technical college but the effect size was relatively small; and, (4) Learners who greatly expanded their vocabulary size tended to pay closer attention to unknown words while reading.

From the above, it was suggested that in order to improve the technical college students' reading fluency through ER, more than 50,000 words should be read in half a year, and explicit instruction should be incorporated to enhance the effects of ER on vocabulary size growth.

研究分野：外国語教育

キーワード：多読 英文読解速度 語彙サイズ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語多読が日本の英語教育で本格的に導入されて10年以上が経過した。日本で取り入れられている英語多読指導は、主として、英語多読三原則と言われる、「辞書は使わない」「分からないところは飛ばす」「つまらなければその本をやめて別の本を読む」に従って行われている(高瀬, 2010)。実践主導的に始まった日本における英語多読指導であるが、第二言語習得研究者からも外国語習得上の意義が主張されており、多読の効果は、TOEIC^Rテストなどの外部試験のスコアの向上をはじめ、英文読解速度の向上、語彙力の向上、文法力の向上、英語情意面の改善などの方面から実証的に報告されている。筆者も本研究開始までに多読実践による英文読解速度への効果や、情意面の改善に関して実証調査を行い、その高い効果を確認してきた。

しかし、現在の多読指導研究において推進しなければならない研究課題は、そういった効果は、「どういった学習者に対して、どの程度、どのように読ませれば、より効果的なのか」、即ち、多読の量・質・学習者の英語力という三要素を含んでの効果の究明である。なぜなら、先行研究の多くは、多読の効果も、主に読語量の観点から一義的に捉えて検証しているが、「どのような学習者に」「どのように」多読に取り組みさせてその効果が得られたのかについて検証した研究は少ないからである。多読指導とは、文字通りなるべく多くの英語を読ませる指導であり、読語量が多読の効果を引き出す最も重要な要素の一つであることは間違いないが、読語量のみが押し並べて全ての学習者に高い英語運用能力を担保する唯一の条件ではないことは、これまでの研究が明らかにしていることである。

そこで本研究では、多読の英文読解速度と語彙サイズの伸長に対する効果に焦点を当て、学習者の英語力、多読の量、読み方の質の三つの観点から詳細に分析することで、多読の効果的な指導指針を提言する。実際、多読を通して多くの英語を読んでいるにも関わらず英語力を伸ばせない学習者も報告されているが、こういった学習者に対して、さらに多くの英語を読ませる指導だけでなく、限られた授業時間や英語学習時間という制約を考えれば、どのように読ませるべきなのかも指導する必要もあるだろう。そして、この指導指針を提言するためには、どの程度の英語力を持っている学習者が、どのように英語を読んで、どのような効果が見られたのかという実証研究が必要である。本研究は、これまでより幅広い学生に対してだけでなく、多読を楽しんでいる市民に対しても還元が可能な、きめ細かな多読指導指針の開発に繋がる点において意義あるものである。

2. 研究の目的

上記の背景に基づき、本研究では多読を通して学習者の意味理解を伴った英文読解速度および語彙サイズを効果的に伸ばすための指導指針を探究、提言することを目的とした。この目的達成のために、大枠として以下の手順で研究を進めた。(1) 授業内多読を定期的に半期間～1年間行った学習者(高専2～3年生)を対象に、英文読解速度および語彙サイズの伸長について実証調査を行った。(2) 多読記録として読語数と読冊数を記入させることで英語多読の量を調査した。(3) 英語をどのように読んでいるのかについては質問紙を使って調査した。(4) 英文読解速度および語彙サイズの伸長の差を生じさせた要因を、期間内読破語数と冊数(量)、英語の読み方(質)、TOEIC Bridge^RおよびTOEIC^Rのスコアを用いた英語運用能力(英語力)の観点から分析した。(5) 分析結果から効果的な多読指導の指針を策定し、学会発表、論文発表を通して提言するとともに、日本多読学会主催の多読セミナー等を通して多読の指導者や多読を楽しんでいる市民に成果公表した。

本研究を通して、英文読解速度と語彙サイズを効果的に伸ばすために、「どういった学習者(英語力)に、どの程度(量)、どのように読ませればいいのか(質)」の観点から多読指導の具体的な指針を探究、提言したが、残された課題については継続して探究を続ける。

3. 研究の方法

(1) 多読が英文読解速度に与える影響に関する研究方法

平成29年度に、授業内で定期的に英語多読を実施することによる、学習者の英文読解速度への影響について調査、分析を行った。

本研究開始前に実施した先行調査では、高等専門学校(高専)2年生118名(CEFRのA1～A2レベル)を対象に、週に1回、30分程度の授業内多読を半期間(14回程度)行い、平均の読語量は47,609語だった。多読を行った期間に、Lexile指数とFlesch Reading Easeを用いて同程度の難易度と語彙レベルであることを確認した英文3種類に内容把握問題をつけて、多読期間内に3回(多読開始前、中間期、多読終了時)英文読解速度調査を行い、各回におけるWPM(Words Per Minute)と、意味理解を伴った英文読解速度指標である「修正WPM」(M-WPM; 卯城, 2009)の値を調査した。その結果、WPMにおいて、1回目の調査と比較し、2回目および3回目の調査で有意に上昇し、修正WPMにおいて、1回目および2回目の調査と比較し、3回目の調査で有意に上昇していたことが分かった。さらに、参加者を、TOEIC Bridge^Rのスコアを用いて英語習熟度、および期間内読語数に応じて、それぞれ3群に分けて分析した結果、英語習熟度が高い学習者は元々英文読解速度が速いだけでなく、多読指導によって読解速度が大きく上昇すること、期間内に多くの英語を読む学習者ほど、読解速度の上昇が大きく、特に意味理解を伴った読力の養成に貢献する可能性が示唆された。

しかし、この先行調査には対照群がなかったため、先行調査における参加者を処置群とした上

で、平成 29 年度に、異なる高等専門学校 2 年生 123 名 (1 年次受験 TOEIC Bridge^R のスコアにおいて、先行調査の参加者と有意差なし) を対照群として、授業内多読を行わない期間に先行調査と同一の調査を同一回数行い、多読による英文読解速度の変化への影響を精緻に研究することにした。両群の参加者と研究方法については表 1 に示した通りである。

表 1 多読による英文読解速度への変化に関する研究参加者

参加者	n	学年	1 年次 11 月	2 年次前期	2 年次後期
処置群	118	高専 2 年	TOEIC Bridge	検定教科書	検定教科書 + 週 1 回多読速読調査(9, 12, 2 月)
対照群	123	高専 2 年	両群間で有意差なし	検定教科書速読調査(4, 6, 9 月)	検定教科書 + 週 1 回多読

(2) 多読が語彙サイズに与える影響に関する研究方法

平成 30 年度に、授業内で定期的に英語多読を実施することによる、学習者の語彙サイズへの影響について調査、分析を行った。

高専 3 年生 36 名 (CEFR の A2 レベル) を対象に、週 1 回、30 分程度の授業内多読を 1 年間 (30 回程度) 行い、平均の読語量は 55,919 語だった。多読を行った期間の最初と最後に、日本人英語学習者のために開発された語彙サイズテスト (通称、望月テスト) (望月, 1998) のうち、VST11 ~ VST51 を実施し、その結果を分析した。

4. 研究成果

(1) 英語多読が英文読解速度に与えた影響

英語多読が読解速度に与える影響に行った研究結果は、表 2 で示した通りである。

表 2 3 回の速読調査における WPM および修正 WPM

		処置群 (n=118)	対照群 (n=123)	有意差
		M (SD)	M (SD)	
調査 1	WPM	95.8 (22.4)	99.9 (32.6)	n.s.
	M-WPM	77.2 (27.1)	80.5 (38.6)	n.s.
調査 2	WPM	117.8 (31.7)	111.1 (40.0)	n.s.
	M-WPM	81.0 (33.2)	76.7 (38.6)	n.s.
調査 3	WPM	124.0 (33.5)	113.1 (37.9)	処 > 対 * _t
	M-WPM	107.9 (37.6)	89.5 (37.6)	処 > 対 *** _t

***: p<.001 ** : p<.01 * : p<.05 n.s.: 有意差なし

本研究で得られた重要な知見としては、高専 2 年生を対象に、半期間 (15 週間) で 5 万語程度の多読を行うことで、多読を行わない場合と比べ、意味理解を伴った読解速度は有意に上昇するという点である。

さらに、この研究結果を、学習者の英語習熟度および期間内読語数の観点からそれぞれ分析した結果が、それぞれ表 3 および表 4 で示されている。英語習熟度に関しては、処置群の参加者が受験した直前 (1 年次の 11 月に受験) の英語運用能力試験である TOEIC Bridge^R テストのスコアを使い、上位群、中位群、下位群の 3 群に分けた。スコアが 130 点以上を上位群 (n=41)、120 点から 128 点を中位群 (n=43)、118 点以下を下位群 (n=34) とし、それぞれの群において、多読開始前 (調査 1) から、中間期 (調査 2)、多読終了時 (調査 3) までの WPM および M-WPM の差を検証した (表 3)。上位群は CEFR で概ね A2 レベル、中位群は A1 上位レベル、下位群は A1 中位レベルに該当すると考えられる (IIBC, 2018)。

表 3 英語運用力別 3 群における WPM および M-WPM 平均値の推移

		処・上(n=41)	処・中(n=43)	処・下(n=34)	対照(n=123)	有意差
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
調査 1	WPM	103.7 (22.4)	95.4 (22.1)	86.9 (19.9)	99.9 (32.6)	上=対>下 * _H
	M-WPM	91.6 (27.0)	74.9 (21.5)	62.7 (25.8)	80.5 (38.6)	上>中=下, 対>下 *** _H
調査 2	WPM	131.2 (34.7)	115.9 (28.6)	104.1 (25.4)	111.1 (40.0)	上>下=対 *** _H
	M-WPM	98.7 (36.5)	77.9 (28.3)	64.2 (23.9)	76.7 (38.6)	上>中=下=対 *** _H
調査 3	WPM	136.5 (36.0)	122.4 (31.1)	111.1 (28.5)	113.1 (37.9)	上>下=対 ** _F
	M-WPM	123.1 (38.8)	108.8 (34.2)	88.6 (31.8)	89.5 (37.6)	上=中>下=対 *** _F
上昇値	WPM	32.8 (16.4)	27.0 (9.0)	24.2 (8.6)	13.2 (5.3)	
	M-WPM	31.5 (11.8)	33.9 (12.7)	25.9 (6.0)	9.0 (-1.0)	

***: p<.001 ** : p<.01 * : p<.05 n.s.: 有意差なし

また、多読期間内にどの程度の分量を読んだのかに関して、読語数を用いて分析を行った。多読は本来、100万語程度を目指して行うものであり、数万語程度の読語量では顕著な影響の差は見られない可能性がある。本来の多読指導の性質を鑑み、その影響が分かりやすくなるように、平均的な30,000語から64,999語を読んだ大多数の参加者を中読群 ($n=83$) とし、半期間で授業外でも積極的に読んだと考えられる65,000語以上読んだ参加者を多読群 ($n=17$)、多読授業への参加が消極的であり、授業外ではほとんど読まなかったと考えられる29,999語以下の参加者を少読群 ($n=18$) として分析した(表4)。

表4 期間内読語数別3群におけるWPMおよびM-WPM平均値の推移

		処・多($n=17$)	処・中($n=83$)	処・少($n=18$)	対照($n=123$)	有意差
		$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$	
調査1	WPM	106.7 (16.4)	95.8 (23.0)	85.5 (20.8)	99.9 (32.6)	多>対>少 *H
	M-WPM	85.0 (22.6)	77.1 (27.6)	70.2 (28.2)	80.5 (38.6)	n.s.
調査2	WPM	143.4 (34.7)	117.0 (29.5)	97.2 (22.0)	111.1 (40.0)	多>中>少, 多>対 ***H
	M-WPM	98.8 (44.1)	80.3 (30.2)	67.1 (28.5)	76.7 (38.6)	n.s.
調査3	WPM	137.0 (35.3)	124.8 (33.0)	108.3 (29.6)	113.1 (37.9)	多>少, 多=中>対 *F
	M-WPM	126.7 (42.0)	107.5 (37.2)	92.2 (27.6)	89.5 (37.6)	多>少, 多=中>対 ***F
上昇値	WPM	30.3 (18.9)	29.0 (10.0)	22.8 (8.8)	13.2 (5.3)	
	M-WPM	41.7 (19.4)	30.4 (9.6)	22.0 (-0.6)	9.0 (-1.0)	

***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$ n.s.: 有意差なし

以上の分析による結果の要点としては、英語運用能力の高い学習者の方が、元々英文読解速度が速いだけでなく、多読指導によって英文読解速度が早い段階で大きく上昇すること、A1~A2レベルの高専2年生に対して半期間で5万語程度の多読を行うことで、多読を行わない場合と比べて読解速度が顕著に高まったことである。

なお、対照群の学習者を、1年次の11月に受験したTOEIC Bridge^Rスコアに応じて、処置群と同様に、130点以上を上位群 ($n=36$)、120点から128点を中位群 ($n=46$)、118点以下を下位群 ($n=41$) として処置群と比較してみると、対照群では、WPM、修正WPMともに、上位群であれば上昇値も大きいわけではなく、むしろ下位群の方が英文読解速度を高め、上位群との差が調査1から調査3にかけて狭まっていることがわかった。この結果から、英語運用力が高い学習者ほど英文読解速の上昇値が大きいというのは、多読指導を通じた結果である可能性が示唆された。

(2) 英語多読が語彙サイズに与えた影響

多読指導期間の前後に2回実施した語彙サイズテストの結果は表5の通りである。年間で約56,000語の多読を経験した参加者の語彙サイズは平均194.4語伸び、2回のテスト間で有意差が見られた。ただし、効果量が示す通り、それほど大きな効果は見られなかった。この結果から、A2レベルの高専3年生に対して年間56,000語程度の多読を行うことで語彙サイズを伸ばす可能性があるが、その効果は限定的である可能性が示唆された。

表5 語彙サイズテスト結果

	調査1 $M(SD)$	調査2 $M(SD)$	p	d
$M(SD)$	2,652.8 (555.1)	2,847.2 (638.8)	.016*	.33

* $p<.05$

この結果を詳細に分析するために、付随的学習を促すためには3,000語程度の語彙サイズが必要であるという指摘(中田, 2019)に基づき、多読開始前(調査1)の時点での語彙サイズが3,000語以上の参加者 ($n=10$) と、3,000語未満の参加者 ($n=26$) に分けて分析したが、語彙サイズの伸長に両群間で有意な差は見られなかった。

また、英語学習者向けの多読指導では、Graded Readersを中心に使用し、英語を母語とする子ども用の読み物の使用を避けるべきだという指摘(Webb & Macalister, 2013)に基づき、本研究参加者を語彙サイズの伸長度に応じて2群(上昇群 $n=18$; 停滞群 $n=18$)に分けた後、参加者が読んだ本をGraded Readersと、その他の本(Leveled Readersや児童書)に分けて読語数を計算し、比較したが、両群間で読書傾向に有意な差は見られなかった。さらに、語彙サイズの伸長度に応じて分けたこの2群間(上昇群と停滞群間)で、読み方の質が異なるかを調査するために、多読終了時(調査2)に行った質問紙調査の結果を分析したところ、「英語を読む時、分からない箇所を飛ばしても気にならない」の項目のみ、両群間で有意差が見られた。具体的には、語彙サイズを大きく伸ばした学習者群の方が、未知語や未知の飛ばし読みが気になる傾向が有意に高く、語彙サイズの伸長が停滞した学習者群と比較し、未知語の意味に対してより強い注意(attention)を向けて英語を読んでいた可能性を窺うことができた。

(3) 英文読解速度と語彙サイズを伸ばすための効果的な英語多読指針

多読を取り入れることで、取り入れない場合と比較し、意味理解を伴った英文読解速度の伸長に大きな差が出るが、この有用性を効果的にもたらすために、A1～A2レベルの学習者を対象にした場合、指導者は半期間で少なくとも50,000語の理解可能なインプットを与えるよう授業設計をする指導指針が示唆された。また、A2レベルの学習者や半期間で50,000語以上のペースで多読をする学習者であれば、その効果は短期間で出る可能性があることを考えると、定期的に多読記録を回収する等して多読状況を把握し、学習者に応じた選書の助言や、多読の意義の説明や、日頃の励まし等、指導者が個々の学習者に応じた援助をする必要性も示された。

一方で、多読を取り入れ、年間平均56,000語程度の読語量を得ることで、A2レベルの学習者の語彙サイズ伸長に効果が見られるものの、効果量は大きなものではなかった。この結果から、多読による付随的語彙学習の効果を高めるために、量と質の観点から合わせて2つの指導指針を提案することができる。量の観点からは、元々の語彙サイズの大きさや、読む多読図書への選好に関わらず、年間56,000語程度の多読量では大きな効果を得るためには不十分であり、もっと多くの量を読ませるよう授業設計をする必要があるということである。ではどのくらいの分量を読ませる必要があるのかという問いに直面するが、実践的に研究を継続していかなければならないのと同時に、先行研究で主張されている遭遇回数を満たすために、どの程度の多読図書を読む必要があるかを、コーパス分析を行うことで理論的にも研究を進めて究明する必要がある。ただ、多くの量を読ませるためには長期継続的な指導が必要で、限られたカリキュラムやシラバスの中で現実問題として指導実践が難しい可能性がある。その状況に対して、質の観点から語彙サイズ伸長への示唆を得られたことが本研究の意義と言えるだろう。すなわち、英文を読む際に未知語や未知の表現に注意を向けさせる指導の必要性である。例えば、多読を通して学んだ語や表現をグループ内でシェアをしたり、その語を使って英作文活動をさせたり等、語彙に注意を向けさせる指導を時に応じて行うことは、比較的短期間の多読で語彙サイズを伸ばすために効果的な指針となり得るだろう。しかしながら、どのくらいの頻度で、どの程度、こういった明示的な語彙指導を組み込むべきかに関しては、引き続き実践を通して探究を深めなければならない。

< 引用文献 >

- IIBC (2018). 「TOEIC R Program 各テストスコアと CEFR との対照表」 Retrieved from http://www.iibc-global.org/toeic/official_data/toeic_cefr.html
- 望月正道 (1998). 「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『語学教育研究所紀要』第12号, 27-53.
- 中田達也 (2019). 『英単語学習の科学』東京：研究社.
- 高瀬敦子 (2010). 『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店.
- 卯城裕司 (2009). 『英語リーディングの科学』東京：研究社.
- Webb, S., & Macalister, J. (2013). Is text written for children useful for L2 extensive reading? *TESOL Quarterly*, 47(2), 300-322.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 藤井数馬	4. 巻 48
2. 論文標題 半期間の授業内多読が英文読解速度に与える影響について 英語運用力および読語数からの指導指針とともに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 249, 256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井数馬	4. 巻 12
2. 論文標題 英文読解速度の伸長と英語の読み方の関係に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本多読学会紀要	6. 最初と最後の頁 15, 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井数馬	4. 巻 66
2. 論文標題 英語多読のアウトプット活動としてのミニビブリオバトル	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 24, 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤井数馬	4. 巻 46
2. 論文標題 授業内多読による英文読解速度の変化について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 247, 252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20713/celes.46.0_247	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤井数馬	4. 巻 49
2. 論文標題 1年間の授業内多読が語彙サイズに与える影響について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 33, 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 半期間の授業内多読が英文読解速度に与える影響について
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fujii, K.
2. 発表標題 Effects of the one-semester extensive reading program on the reading fluency development
3. 学会等名 15th Annual CamTESOL Conference on English Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujii, K.
2. 発表標題 Reading fluency development by one-semester extensive reading
3. 学会等名 54th RELC International Conference and 5th Asia-Pacific LSP and Professional Communication Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujii, K.
2. 発表標題 How much should Japanese elementary learners read in a semester to increase their reading rate?
3. 学会等名 The 40th Thai TESOL & PAC International Conference 2020. (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井数馬・末満堅人
2. 発表標題 工学系大学における授業内外での英語多読の取り組み
3. 学会等名 第13回関西多読セミナー (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 英語多読による付随的語彙学習効果を高めるための基礎的研究
3. 学会等名 同志社ことばの会年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 英語多読と図書館支援 実例紹介・今後の可能性と課題
3. 学会等名 第7回九州多読教育セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 1年間の英語多読が語彙サイズに与える影響
3. 学会等名 第49回中部地区英語教育学会石川大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井数馬・市坪誠・立野高陽
2. 発表標題 長岡技術科学大学における多読実践と附属図書館による多読支援
3. 学会等名 第5回シンポジウム「図書館多読への招待」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 自律学習に繋げるための図書館と連携した英語学習支援
3. 学会等名 高等専門学校及び技術科学大学図書館情報交流集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----